



RESEARCH CENTER FOR THE FUTURE CITY DESIGN  
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS  
RESEARCH GROUP FOR THE FUTURE CITY DESIGN  
CORRESPONDING TO GLOBAL ENVIRONMENT PROBLEMS  
<http://future-cities.ynu.ac.jp>

【講演資料】ディスカッション Part II

登坂 博行(シミュレーション研究部会長)、杉山 徹(シミュレーション研究部会)  
小泉 亨(ICT プラットフォーム研究部会長)、矢口 浩平(ICT プラットフォーム研究部会)  
コーディネーター 佐土原 聡(地球環境未来都市研究会長)

// 第2回地球環境未来都市シンポジウム(活動報告とパネルディスカッション)//

地球環境未来都市(横浜・都留)へ向け～ICTプラットフォームを活用して～

# 都市をリ・デザインする

2013年6月15日(土) | 13:00 → 17:00 | 参加無料

横浜国立大学教育文化ホール

## ディスカッション Part II

登坂 博行(シミュレーション研究部会長)

杉山 徹(シミュレーション研究部会)

小泉 亨(ICT プラットフォーム研究部会長)

矢口 浩平(ICT プラットフォーム研究部会)

コーディネーター 佐土原 聡(地球環境未来都市研究会会長)

(佐土原) ICT プラットフォームをなぜここで取り上げているのかというと、一つは、さまざまな関係者が一緒に進めていくには、見えないものを見えるようにすることが非常に重要だからです。また、デザインに生かしていくとなると、直感的に理解できることも必要です。

それから、ディープデータをどのようにみんなが使えるようにするかということでは、プラットフォームが重要な役割を果たします。特に、そのプラットフォームの基盤的なものが GIS だと考えており、3D で扱えるようになったことがその可能性をいろいろと広げてくれます。GIS を含めて、いかにして ICT のプラットフォームという形でまとめていくかは、まだこれからの展開です。小泉さんからお話があったとおりのビジョンで進んでいます。

登坂先生が大気と水と地下のモデルの連成の可能性について話されましたが、最近の測定によると、地中もヒートアイランド化しているようですし、冷却水で海が温まるということもあります。エネルギーをうまく使いながら、地中、水、大気まで含めたトータルな熱の管理できないかということで、連成という無理な要求をしているわけですが、今後かなり面白いことに展開できそうですか。

(登坂) 何らかの改善は当然あり得ると思います。ただ、それがわれわれにどれほど必要かといわれると、場合によっては必要ではないし、場合によっては必要になるということかと思えます。

最近、情報量が多くなり、シミュレータ自体も複雑になっているので、果たしてわれわれは何を見たいのか、分からなくなることがあります。例えば、われわれは直感で捉え切れないものを予測するためにシミュレーションをするわけですが、その結果は最終的に直感に合わなくてははいけないという矛盾があるのです。局地では直感に合うシミュレーションができなければいけないけれども、全体のシステムは直感では捉え切れないので、シミュレーションしなければいけないと思います。

今後は、もう少しいろいろと検討しながら、河川の流れや洪水・氾濫の問題、あるいは熱の問題で改善が見られるように努力していきたいと思えます。

(佐土原) 杉山さん、JAMSTEC としてはどのような展開を期待しておられますか。

(杉山) どれだけ正確にできているかは、いつも検証しなくてははいけないものです。皆さまのご協力があれば、初期データとしても使えますし、計算後の確認にも使えるということです。

もう一つ、何のために計算しているかをいつも考えなくてははいけません。研究者の興味と社会の興味がうまくマッチすると、もっと素晴らしい成果になっていきます。そのようなところも見つけながら研究を進めていきたいと思っています。



(佐土原) ICT プラットフォームに関しては、小泉さんから今後の計画がいろいろ出されました。では、どの辺がはっきりしてくると全体像を考えやすいか、提示してもらえたらありがたいというものはありますか。

(小泉) 一番は、ユーザーが何をしようと思っているかです。全体会議をしたり、各部会の議論に私どもプラットフォーム部隊が参加したりして集めた情報を整理していく中で、私どものイメージがどんどん進んでいくのだと思っています。この 1 年間は、私どもの中でもまだそこまでいっていないところがあったのですが、次の 1 年は随分具体化できそうなので、ぜひともいろいろな場所で情報交換をさせていただきたいと思います。

(佐土原) 矢口さん、使い方をどんどん出していただくと、まずは GIS ベースで展開していくかと思うのですが。

(矢口) 政府のオープンデータ戦略をはじめ、今後、膨大な数のデータが世の中に出てくるでしょうし、それを活用していかなければならないと思います。GIS はまだハードルが高いといわれるところがありますので、私どもの企業としても、研究会の中でも、ハードルを下げるように努めていきたいと思っています。

(佐土原) ニーズということになると、やはり自治体の方がどのように活用したいかということがあると思います。信時さんと奈良さんから、こんなニーズがありそうだということをお話いただけるとありがたいのですが。

(信時) これからは、異種異能のコミュニケーションが必要だと思います。横浜市と都留市はもともと地理的に離れており、別々にやってきたわけですが、一緒にやっていると新しいことが発見できたり、共通項も出てきたりするかもしれません。それもこの研究会の機能かと思っています。

それから、先ほど見えないものを可視化するというお話がありました。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ということわざにあるように、枯れ尾花が素晴らしい花であるかもしれません。われわれが見えないところをぜひ可視化していただきたいと思いますし、自治体の機能として、高度な研究と社会的なニーズ、市民的なニーズをマッチさせていければと思います。

(奈良) 今まで国や県の言いなりだった小さな自治体が、自ら判断できるツールになる可能性があると思います。よそでやっていることを、なぜ地元の自治体がやらないのかというときに、そのベースには、地元のことをあまりにも知らない、情報の集積がないということがあります。データをビックデータからディープデータ化して、しかもそれをオープンにしていくことは、これからの地域の中で見たときにも大きな要素になっていくと思います。このようなことが横浜市とつながっていくきっかけになることを期待しています。

(佐土原) どうもありがとうございました。このセッションのディスカッションは以上で終了とします。